

5. アディクション（依存症）

■さまざまな依存症と依存傾向

依存症と診断されたと回答した人の割合を、種類別に図5-1に示しました。ニコチン依存症が40人（4.4%）で最も多く、薬物依存症が31人（3.4%）、性依存症・性的強迫症が25人（2.8%）と続きました。2013～14年に実施された第1回調査結果と比較すると、全体として割合が大きくなっていました。

特に診断はされていないが自分がそうではないかと思う依存の種類を図5-2に示しました。最も多かったのはスマホ依存で277人（30.5%）でした。なお、インターネット依存は、第1回は277名（30.3%）でしたが、第3回は125名（13.8%）と減少していました。また、第3回調査では、性依存が216人（23.8%）、ニコチン依存が164人（18.1%）と多くなっていました。

図5-1 医師から診断された依存症の割合（%、第1回 n=912, 第3回 n=908）

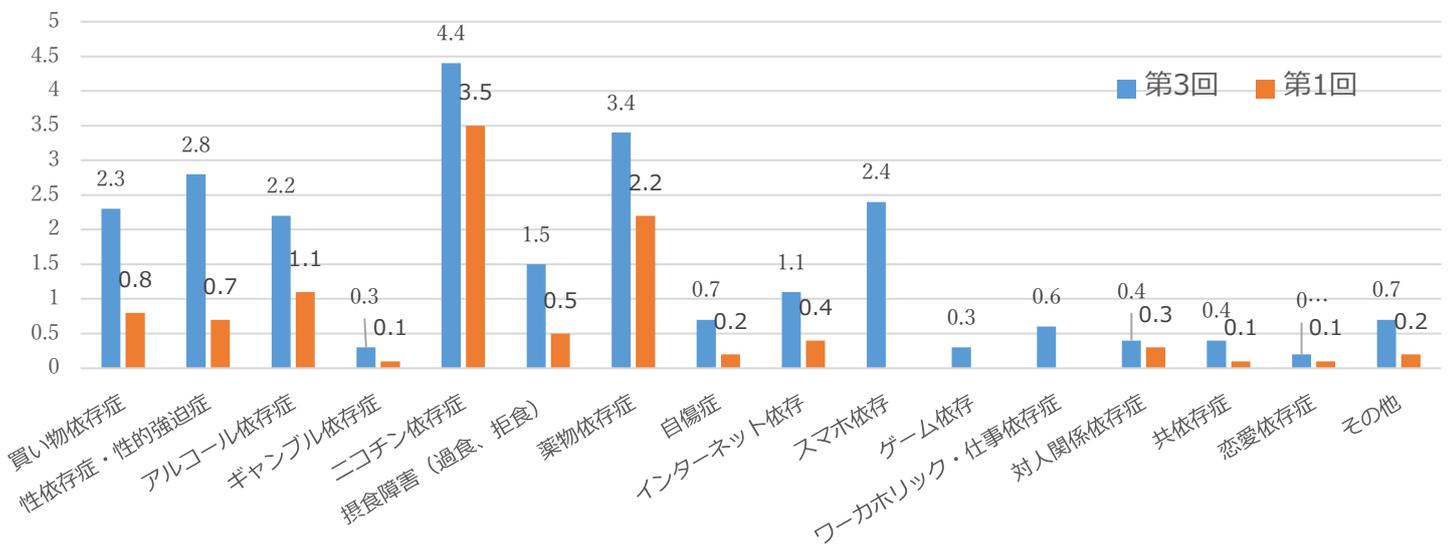
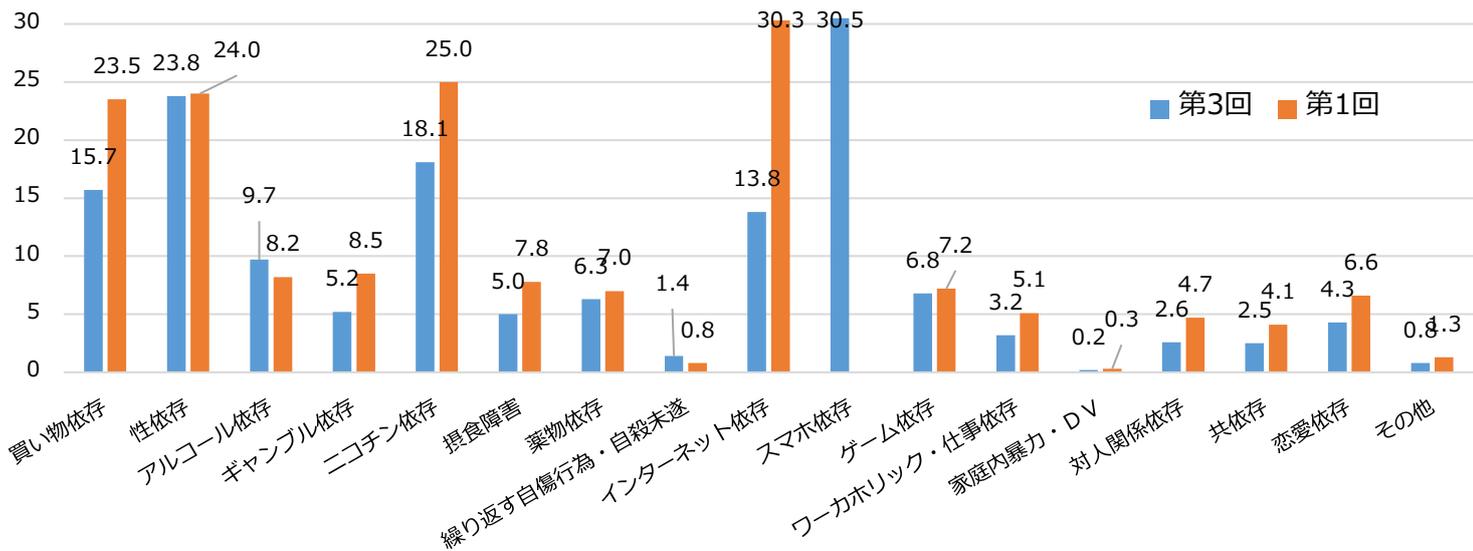


図5-2 自分がそうだと思う依存傾向（%、第1回 N=912, 第2回 N=908）

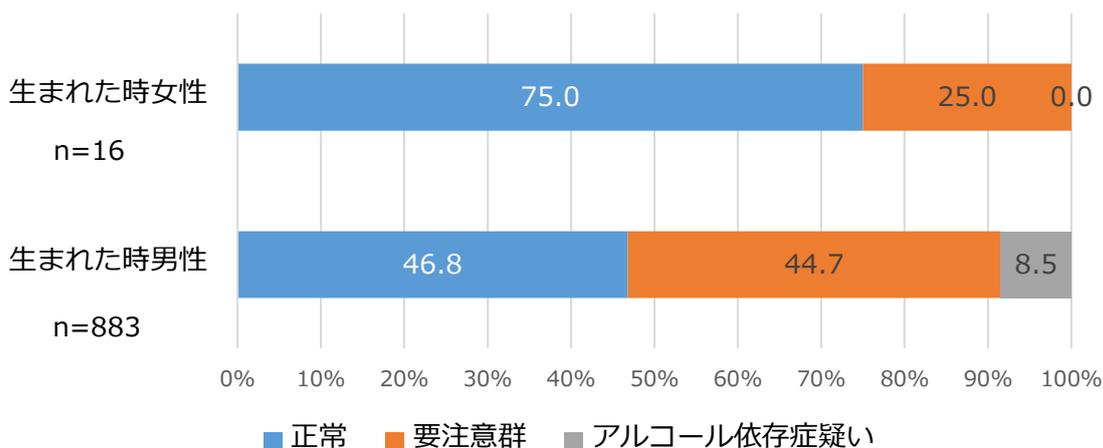


■アルコール依存症スクリーニングテスト

今回の調査では、新久里浜式アルコール依存症スクリーニングテスト（KAST）を実施しました。KASTは、生まれたときの（生物学的な）性別で回答をすると定められているため、今回の分析もそれに従って実施しています。またKASTでは、回答データをもとに、アルコール依存症の疑い、要注意群、正常群の3段階で判定がなされます。

分析の結果、女性では、要注意群は4名（25.0%）で、依存症疑いはいませんでした。男性では、要注意群は395名（44.7%）、依存症疑いは75名（8.5%）でした。2003年の一般住民全国調査（旧版のKAST）では、要注意群は3.9%で、今回の結果はそれを大きく上回っていました。

図5-3 医師から診断された依存症の割合（%）



■レクレেশヨナルドラッグの使用

疾患や症状の治癒の目的で用いるのではなく、自身の快楽を目的に用いる薬のことを専門的には「レクレেশヨナルドラッグ」と呼ばれることがあります。法律で規制されているものから、身近にあるアルコール、ニコチン、シンナーも含まれます。今回はアルコールやニコチンは別に検討しましたので、それ以外のレクレেশヨナルドラッグについてみていきます。

過去1年以内にラッシュや勃起薬を含むドラッグを使用した経験がある人は350人(38.5%)でした。ラッシュや勃起薬を除くと74人(8.1%)でした。

種類別にドラッグの使用状況について図5-5に示しました。最も多かったのは西洋系勃起薬で264名(29.1%)、次いでラッシュ89人(9.6%)、漢方系勃起薬64人(7.0%)、覚せい剤39人(4.3%)、大麻19人(2.1%)、エアダスター類16人(1.8%)の順でした。

図5-4 過去1年以内にレクレেশヨナルドラッグを使用した経験の割合(%)と、第1回調査から第3回調査までの変化

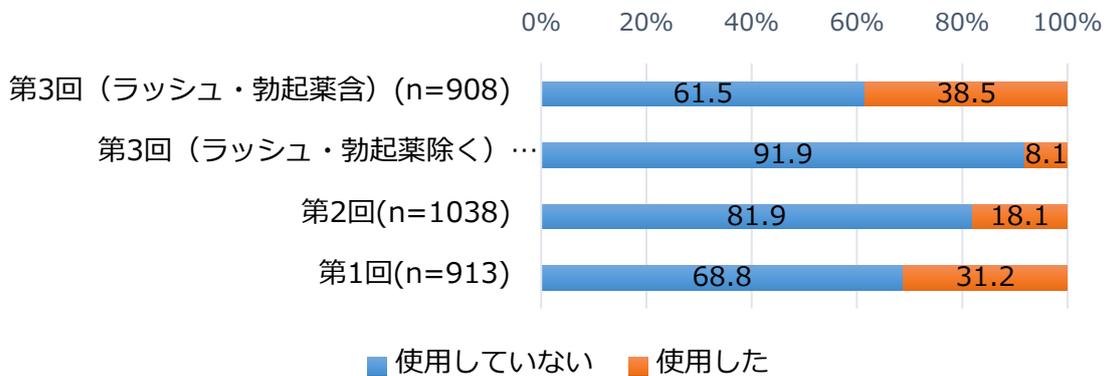


図5-5 過去1年以内に各種レクレেশヨナルドラッグを使用した経験の割合(%)

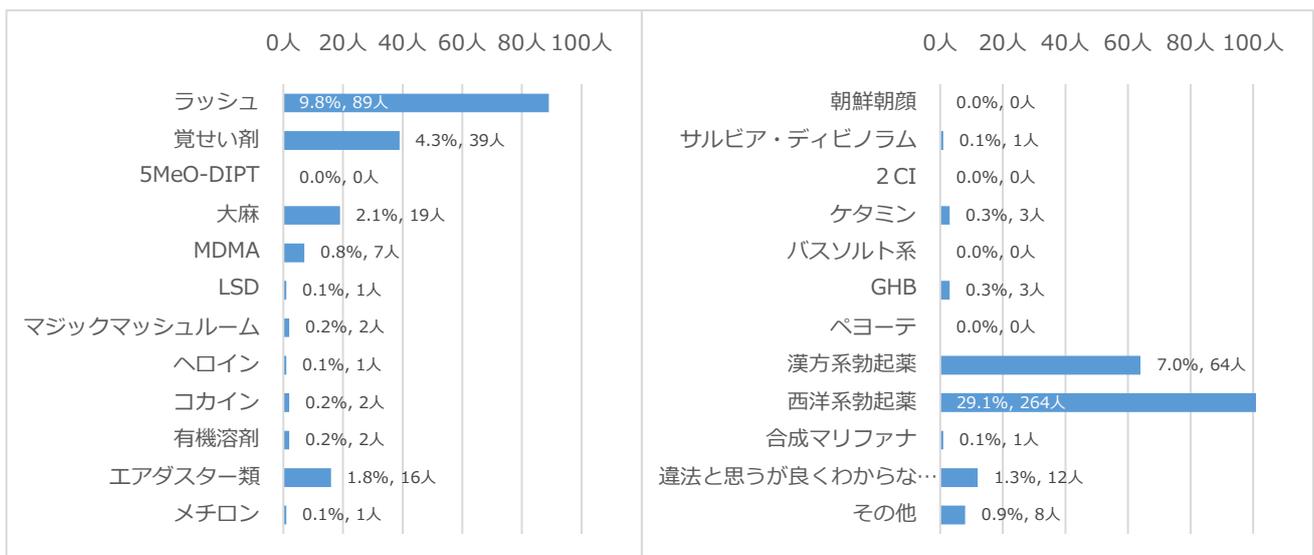


図 5-6 主要な薬物別 1 年以内にドラッグを使用した経験の割合 (%) の比較

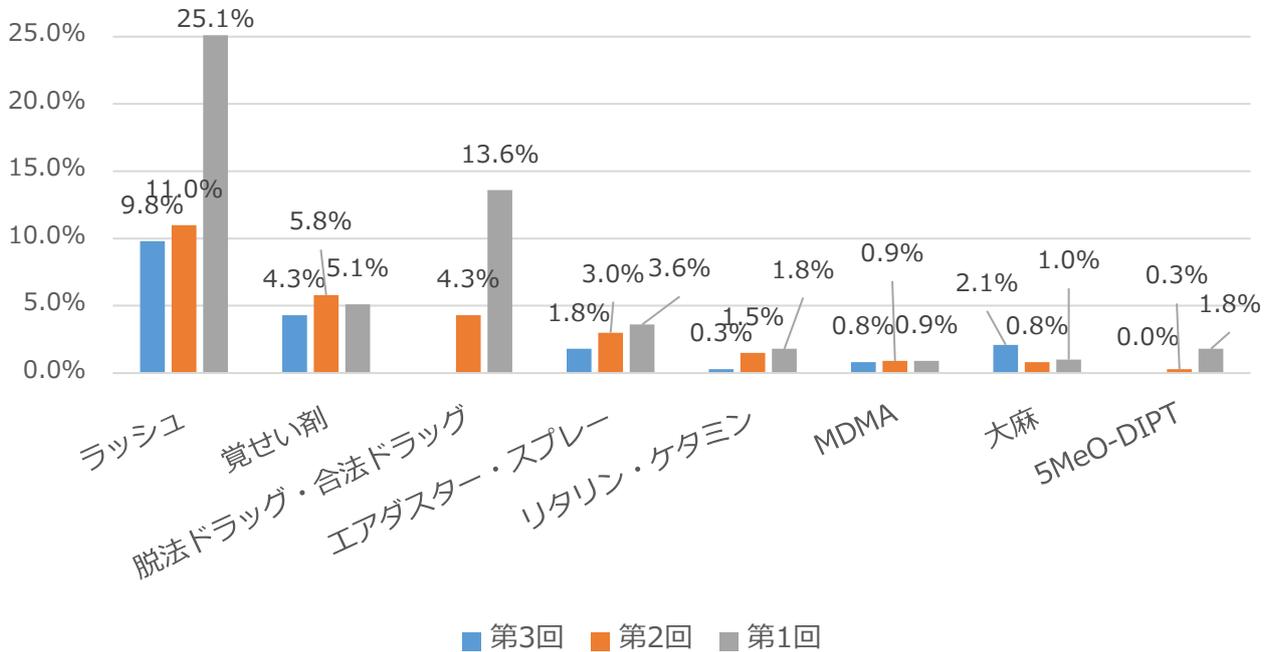


図 5-6 に、第 1 回、第 2 回の調査結果で頻度の多かった 8 つの主要薬物について、第 1 回から第 3 回までの使用状況について、変化がわかるように示しました。これを見ると、規制が大幅に強化された脱法ドラッグ・合法ドラッグ、およびエアダスター・スプレー、リタリン・ケタミンの使用状況は減少していました。ラッシュについては、第 2 回調査から第 3 回調査にかけては概ね横ばいの値でそれぞれ 1 割の人が過去 1 年間に使用した経験がありました。覚せい剤はほぼ横ばいで 4~5%程度でした。

■ 市販薬の規定外使用

医師からの処方箋による処方薬ではなく、ドラッグストアなどで手軽に購入できる市販薬の使用について聞きました。ここでは、鎮痛剤、精神安定剤、睡眠剤、鎮咳剤のそれぞれについて、規定の用法用量以外で使用した経験について、その頻度を聞きました。

週に何度かそうした摂取をしている人の割合は、鎮痛剤で 28 人 (3.1%)、精神安定剤は 27 人 (3.0%)、睡眠剤は 48 人 (5.3%)、鎮咳剤は 7 人 (0.8%) となっていました。

図 5-7 市販薬の規定外使用の頻度

